

アップ西日本コース報告

開講式



講義風景 (政池先生)



ファンタジー



交流会



第38回労働リーダーシップ西日本コースは、2007年1月11～27日の日程で、京都・関西セミナーハウスで開校した。同コースには、加盟産別・単組から32名（内友誼2名）が受講、労働組合リーダーとして必要な基礎知識を4つの柱にもとづく魅力ある多彩な講義を通して学ぶと共に、4つのゼミナールに分かれて、労組・職場での課題について活発な議論をした。この他、グローバルな資質を養うために、早朝の7回にわたる英会話講座、京都の文化を体験する茶室体験、人生の意味を考える朝の会、職場の課題をみんなで自由に話し合う討論会、スポーツを通して人間交流を深めるボーリング大会と、班別対抗の寸劇も飛び出す交流会、有志で久しぶりに実施した比叡山登山、そして、経営者から話しを聞く伝統ある特別講演「経営と人間」など、多彩な特別プログラムが行われた。

▼特別プログラム

特別プログラムとして、團野 J・C 事務局長による開校講演「これからの労働運動とリーダー像」、経営者による特別講演「経営と人間」（トヨタ自動車株式会社木下光男取締役副社長）、米国の留学生5人を講師

とする朝45分ずつ計7回にわたる「英会話」、受講生運営による自主的な討論会は、1月18日晚、出店方式で行った。「組合が政治に関わる必要性は？」、「私が思う時間管理について」、「職場の男女格差」など6つのテーマ別のテーブルを設け、自分の興味のあるテーマに集まり、活発な討論を行った。

▼ゼミナールでの徹底した討論と学びあい

受講生は指導講師のもと4つのゼミナールに分かれた。「労働組合と人間」（平田哲校長）、「労働組合と世界」（香川

孝三副校長）、「労働組合と職場」（石田光男運営委員／同志社大学教授）、「労働組合と社会」（中田喜文同志社大学教授）をテーマに4回のゼミナールで組合や職場における様々な課題について議論を行った。その成果を各人のレポートにまとめると共に、1月26日にゼミナールまとめを行った。午前中は各ゼミに分かれて、個人レポートの発表を行った後、全体総括としてゼミ別に成果を発表し、質疑応答、ゼミ担当講師のコメントを行った。

◎受講生のレポートテーマは

第38回労働リーダーシップ

以下の通り

【平田ゼミ】「時代の求める労働組合の役割」（マツダ労組・豊島敦海）、「職業と人生の意味を考える」（松下電器本社技術労組生研支部・森精志）、「職業と人生の意味を考える」（パナソニックAVCネットワークス労組福島支部・塩澤



討論会



英会話

基、「若者はなぜ3年で辞めるのか？」を読んで」（松下電工労組・山田貴司）、「職業と人生の意味を考える」（コマツユニオン小山支部・五十嵐徹）、「職業と人生の意味を考える」（基幹労連・柴山亜沙美）、「自分らしく生きていくためには何が必要か」～愛を



ゼミまともを聴く受講生



ゼミまとも風景



閉校式での答辞

もって生きていくことの大切さ」（三菱電線工業労組・正森弘樹）、「労働組合と人間」について（全労済・重富健太郎）
 【香川ゼミ】「模倣品・海賊版の現状と課題」（三洋労組兵庫徳島支部・大東直樹、三洋労組大東事業所支部・磯山智哉、コマツユニオン真岡支部・矢洵宏）、「21世紀国際社会における労働組合の役割」～中国進出における現状と課題～（本田技研労組栃木研究所支部・沖尚彦、ホシデン労組・西川博文、新日鐵住金ステンレス労組・藤田英二）、「日本における外国人労働者問題に関する考察」（全本田労連・今北誠、パナソニックAVCネ

記念撮影



ットワークス労組岡山支部・宮崎哲治）
 【石田ゼミ】「労働組合と職場」～ひと（トヨタ車体労組・吉續武俊）、「労働組合と職場」～労働組合機能の再発見とフロンティアの展望（ヤマハ発動機労組・白瀧健志）、「これからの労使関係と労働組合の新しい役割」（パナソニックAVCネットワークス労組・三吉勉）、「労働組合と職場」～我々は何をすべきか～労働組

運営委員長コメント

●労働リーダーシップ西日本コース運営委員長

中條 毅 ちゅうじょう・たけし

平田新校長の下、第38回コース無事終了



昨年8月に竹中正夫校長が急逝、「労働リーダーシップ西日本コース」は大きな打撃を受けた。平田哲新校長は、見事にそれをカバーして第38回の運営を乗り切った。高齢運営委員長の私にとっては、事務局次長の若松英幸氏、組織総務局の渡辺美知夫氏、上口智子主任がしっかり中央で事務局を支え、京都・関西セミナーハウスには高橋正主事が敢闘していたので、会の継続運営には大きい支障はなかった。何よりも香川・石田・中田の3教授が平田氏と共に、格調高いゼミの論陣を張っていたので、緊急の場合の対策は、特に懸念するところはなかった。

ただ、37年間、創設者、クリエイティブリーダーとして、香り高きビジョンを持ち、会の運営に情熱と理想を捧げてきた竹中校長を失ったことは、私たちスタッフ、それに約1300人の同コース修了生にとって、それは歴史の輝かしい一つの幕が下りた感であったと思われる。

私は1978年の第9回コースより、運営委員長として参画し、まず石田・香川両教授をゼミ担当者として雇用・労働問題の専門領域を強化した。それまでは竹中・平田両氏を中心とした「人間と文化」の領域が主体であったように思われる。

以降、大学教授連を含めた雇用・労働の専門領域は、大幅に広げられたが、労働若手リーダー達の教育にとって最も大事なことは、往年の大リーダー達の体験と歴史を踏まえたスケールの大きな講義を体得することであった。鉄鋼の宮田義二氏、電機の鈴木勝利氏、古賀伸明氏、自動車の草野忠義氏、加藤裕治諸氏の錚々たる現役・OBメンバーの面々は今も健在である。

一方、経営者は、企業組織の枠に拘束されるというが、特別講演「経営と人間」の中に説かれた第1回松下電器の松下幸之助氏から第38回のトヨタ自動車の木下光男氏に到る38氏の代表的経営哲学にはやはり夢が溢れていた。(『労働と人間を考える』中條毅・竹中正夫編著 参照)

合の存在意義を考える」(三洋電機 労組岐阜滋賀支部・中井久男)、「労働組合の存在価値(意義)の再構築」(オムロン労組本部・枋靖博)、「目標管理制度の改革」(コマツユニオン北陸支部・納合広嗣)、「労働組合の現状と課題」(JFE スチール福山労組・長田誠一)、「労働組合と職場」(全労済大阪府本部・辻本和也)

久、「仕事と処遇」(マツダ労組・田畑泰生)、「仕事と処遇」(パナソニックAVCネットワークス労組 テレビ支部・西口勲)、「労働組合と社会」(仕事と処遇) (日本電気 労組中央研究所支部・曾山誠)、「各社の賃金体系を知り、自社の賃金体系の今後を考える」(松下電気 労組・山内隆宏)、「仕事と処遇」(ダイヘン労組・菊永哲也)、「仕事と処遇」(神戸製鋼所労組神戸支部・山口康志)

1月27日午前全員で感想発表した後、閉校式を行った。最初に平田校長から式辞を受けた後、平田校長から受講生32人全員に修了証が授与された。金属労協を代表して加藤議長が餞の言葉を贈った。修了生の総数は、1266名となった。

次回第39回コースの日程

次回第39回労働リーダーシップコースは、2008年1月9日(水)～1月26日(土)の日程で、京都・関西セミナーハウスで開催される予定である。



全員で円陣組み再会を約す

ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ西日本コース副校長／大阪女学院大学教授

香川孝三 かがわ・こうぞう

『労働組合と世界』

竹中先生が亡くなられて運営体制の一部変更によって、副校長となつてはじめてのリーダーシップコースであった。それまでと違ったこと、は開講式に出席したことである。受講生の不安そうな表情がうかがえ、閉講式とは違った雰囲気であった。

ゼミのテーマは例年通り、労働組合の国際的な活動についてであった。その活動はさまざまな論点を含んでおり、例年3点に絞ってきた。今年の特徴は知的財産権、中でも特許や商標の問題を取り上げたことである。中国その他の国で日本企業の製品のコピーが無許可でまわり、日本企業が多額の損害を受けてきたことから組合としてどう取り組むか、労使協議の場で議論された場合にどう取り組めばいいかという実践的な課題になるテーマであった。その背景には受講生に技術出身者が増えてきたことがあると思う。知的財産権の問題は企業の法務部が担当し、かなり専門性の高い分野である。基礎知識が十分でない状況の中で議論するのは大変で、こちらからの解説が多くならざるを得なかった。最後にはまとめて報告しなければならぬので受講生は苦勞されたのではないかと思う。受講生の所属する企業にとっては企業秘密を含む問題であるために、具体例をあげて報告することができなかった。

最近気になっていることは、日本の企業別組合は内向きになっていて、国際的な問題は上部団体におまかせという感じになってはいないかということである。受講生は単組から来ておられるので、そのように感じるのかもしれない。企業が海外に進出するにともなう組合員が海外に派遣や出張にでかけているので、それによって発生する問題には取り組んでいると思うが、国の政策にかかわるような国際問題には上部団体の役割とする考えが強いのではないと思われる。組合間の役割分業は必要であろうが、あなたまかせにはできない問題には積極的に関与する必要があると考える。



香川ゼミ風景



校長・ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ西日本コース校長／アジアボランティアセンター代表

平田 哲 ひらた・さとし

『労働組合と人間』

—多様性の中の共感性

第38回労働リーダーシップコースは、西は山口県から東は茨城県の自動車総連8名、電機連合15名、JAM3名、基幹労連4名、友誼団体3名、総勢32名の参加者で開催された。最近では高学歴化し、中高年の方々が多くなってきた。女性の参加者は1名のみで依然少数である。

今年で開校以来1166名の参加者があり、第37回労働リーダーシップコースの昨年度では1234名であった。この間、最初から校長としてご指導くださった故竹中正夫先生を天上におくり、あまりの突然の出来事に私共は意気消沈し、一時はこのコースも、どうなるのかと不安を感じた。しかし故竹中先生はいつも「初心に返って」と叱咤激励をされていた。故竹中先生のこのコースの概念チャートによれば「第一に自分の立つ歴史的背景を学ぶ、第二は自分の立っている場について学ぶ、第三に自分の住む世界の広がりについて学ぶ、第四は自分の生きる基礎について学ぶ」ことの重要性が示されている。この枠組みはこのコースの原点である。

とは云え、現実の課題として、今年は格差社会の問題を取り上げた。日本の労働運動も組織率の低下が起り、アルバイトや派遣労働者、ニート、非正規労働者を含めて労働運動の仲間として、社会的に弱い立場にある労働者と共生することが求められている。



平田ゼミ風景

この3週間のコースは、何と云っても参加者同士の交流が緊密になされ、あたかも「ぶどうの一房」のように結びついていたことが特徴だった。この結果、お互いに情報交換をし、共に学んだ仲間として、将来においても、切っても切り離されない関係の基礎となっている。

社会が混沌とし、人間関係が危機的状況にある時、職場も、家庭も、地域社会も、より人間らしい暖かさを回復することが必要である。ここに労働組合の社会的貢献がこのコースから生まれてくることを願ってやまない。

ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ西日本コース運営委員／同志社大学社会学部教授

中田喜文 なかた・よしふみ

『労働組合と社会』

～仕事と処遇について～

本年も昨年に引き続き、「仕事と処遇～納得性のある給与の決め方と水準」とのテーマを設定し、ゼミを担当した。昨年度は始めてゼミを担当し、少し戸惑う場面もあったが、今年は昨年の経験から、ある程度は参加者の興味や雰囲気は理解していたので、戸惑うことも無く第2年度の中田ゼミを終えられた。

ゼミの狙いとしては、1) 給与の多様な意味の理解を通して、組合活動に対する多様なステークホルダーの存在を理解する(組合活動の社会性の理解)、2) 日本の給与の決め方と水準の実態を知ること、その背景にあるロジックを理解する、3) そのような実態とロジックの納得性の評価を通して、今後の組合の賃金政策のあるべき姿について考えをまとめる、の3点を設定した。この目標達成のため、ゼミでは所属する組織の賃金制度と水準について調査報告し、さらには他のJC組合の賃金制度と水準を他のゼミメンバーの発表を通して理解し、自組織との差異とその理由を議論した。最後にこれらの検討結果を総括し、IMF-JC組織における賃金の決め方とそのロジック、およびその納得性を全体で議論したうえで、自組織にとって望ましい賃金制度と水準、およびそのロジックを提言した。



中田ゼミ風景

昨年と比べると合宿中の「宿題」は最小限に抑えたので、昨年の反省点であった他班との少ない交流時間については、幾分か改善されたのではと思っている。今年も昨年に勝るとも劣らぬ、兵(つわもの)ぞろい中田ゼミで、緊張感が途切れることの無いゼミ活動であったが、セミナーハウスを去る時には、連帯感と友情の気綱を確認しあってそれぞれの組織に戻って行ったと信じている。



ゼミナール担当講師のコメント

●労働リーダーシップ西日本コース運営委員／同志社大学社会学部教授

石田光男 いしだ・みつお

『労働組合と職場』

私のゼミは例年「労働組合と職場」をテーマにしている。三吉、長田、白瀧、辻本、中井、納谷、へぎ、吉続の8人の有能で元気な参加者を得て活発な議論を行うことができた。

ゼミで議論し発表へとまとめ上げたテーマはただ一つ。「労働組合は企業内や職場で何をすべきか」である。様々な職場実態と労働組合の直面している問題の討議を通じて「仕事と賃金の個別化」が中心的論点になることを共有した。その焦点は「目標管理システムに対する労働組合の関与」を考えることであった。

この関与には会社、事業部レベルと個人レベルを分けて考える必要がある。会社・事業部レベルでは経営・事業計画に対する労使協議という関与が存在する。他方個人レベルでは上司との目標面接が存在する。この場合、大まかに言って、①間接部門では「労使協議」の充実が課題であり、②直接部門では「目標面接」による個人評価に限界性・無理がある。

①は職場に近づくほど「人的課題」や「職場風土」がネックになってきちんとした協議にならない。そこで、重要なことは、職場レベルで「労使の課題共有」「問題解決」のための「ざっくばらんな話し合い」を丁寧におこない、信頼感に満ちた職場を形成することである。②の直接部門の目標面接による個人評価は、チーム作業が重要であるため、「チームの成果やプロセスの評価」軸として、個人については「能力評価」を副軸的に行う。これにより「チームで助け合う風土作り」に注力し「現場力を向上させること」が肝要である。

以上が議論と方針の要約である。私が感銘を受けたのは経験に基づく地に着いた議論がしっかりできる人たちが組合役員にたくさんいるという事実であった。日本の経営や雇用制度の変革が市場重視の方向で急激になされた。だが、今という時期は日本の「強み」を体感している有能な組合役員が新しい雇用ルールの形成に向けて理性的な政策論議を展開する好機であると感じた。重要な歴史の転換点である。



石田ゼミ風景

受講生代表コメント

●基幹労連／組織グループ職員

柴山 亜沙美 しばやま・あさみ

全国に産別の枠を 越えた仲間が



基幹労連本部から初めて参加者を出したのが昨年。昨年の参加者を決める時にすでに私の参加が決まっていたようで、一昨年その事を当時の上司から聞かされました。あまりにも前に言われていたのですっかり忘れていましたが、今回の募集にあたり改めて参加することを告げられました。研修会の主催側の経験はありますが、自分が参加者になるのは初めてで、とても不安な気持ちを抱きながら研修初日を迎えました。当日、受付を済ませると参加者に女性が私一人しかいないことが判明。まだ始まっていないのに、帰りたくなりました…。しかし、開校式、オリエンテーションや自己紹介をしていくうちに、少しずつ打ち解けていき夜には参加者全員で酒を酌み交わす仲（私は飲めませんが…）にまでなっており、なんとなくやっていけそうな気がしました。

いざ始まってみると、講義がほとんどではありましたが、ゼミで話し合いをしたり、スポーツ交流をしたりと非日常的な毎日でありながらも、新しい事の連続で毎日があっという間に過ぎていきました。業種ごとの違い、各組合（企業）での取り組みなど、ためになる事がとても多かった。他にも組合員を直接相手にしている皆さんの話を聞いた事は、とても貴重な経験になり、これからの自分にとって仕事以外にもとてもプラスになったと思います。また、研修期間がもう少し短くならないかと個人的には思う。組織や参加者が、期間の長さのために参加をしない（できない）のなら、とても残念だしもったいないと思いました。特に女性の参加者を増やそうとするならなおさらの事で、目的等を明確にしプログラムを工夫すればもう少し短くできるような気がします。

最後に、今回、参加してみて全国に産別の枠を越えた仲間ができたことがなよりの成果だったと思います。このような機会を与えてくれたJCと基幹労連に感謝します。本当にありがとうございました！



開校式後の仕上げ—平田校長を囲んで

受講生代表コメント

●本田技研労働組合／本社全国支部書記
次長

上田 晃久 うえだ・てるひさ

仲間との出会いが最高の財産



リーダーシップコースが終了して早くも半年が経とうとしています。今回参加にあたっては、長期間のセミナーであり不安と期待の中での参加となりました。内容は4つのゼミナールに分かれテーマに沿った議論、労働組合活動だけでなく幅広い講義など、どれも今までに無い新鮮な気持ちで受講できたと思います。

内容は「時代の求める労働組合の役割」を総合テーマにした様々な講義がありオスマン・サンコンさんの「大地の教え」に始まり「深層心理」まで多くの知識を学べたことは今後の組合活動、特に総合テーマである「時代の求める労働組合の役割」を考える上で非常に参考になりました。一方でゼミナールにおいては各産別組合の課題なり、労使で取組んでいる各種制度の状況など、ゼミでのテーマ議論はもちろんですが現状の活動状況についても深夜まで議論をしました。これらの講義、ゼミでの議論を通じて組合役員としてもっと幅広い知識を得ることが大切であると感じました。

またカリキュラムの中では毎朝早朝のラジオ体操、ウォーキング、座禅などがあり心身共にリフレッシュ出来ました。特に8年ぶりに再開した比叡山登山は印象に残っており思ったより険しい登山道を登っていく中で次第に連帯感が強くなっていくのを感じました。今回のリーダーシップコースでは受講生の代表による実行委員会があり全体運営の一部を担うやり方は非常に興味深いものがありました。いずれにしても大きな財産である仲間に出会えたことは今後の組合活動のみならず人生においても大切にしていきたいと思っています。

最後に大変お世話になった関西セミナーハウスのみなさん、平田校長を始めとした運営委員のみなさまにあらためてお礼を申し上げます。ほんとうにお世話になりました。

今後はこの経験を活かせる活動を続けていきます。



早朝座禅